

# 日本の美徳を失うことは 国を弱体化させる

在仏コラムニスト 安部 雅延

## 床の間の再発見

縁あって日本床の間文化学会というところの手伝いをしている。私のミッションは世界に床の間を広め、TOKONOMAという言葉の世界に定着させることにある。

長年、フランスのビジネススクールで日本文化や日本の経営を講義していたこともあり、床の間から日本の美と精神文化を再発見するという目的に共感した。長期間、海外にいると愛国心が強くなる場合と、滞在国の文化に染まり日本を軽蔑する棄民になる場合に分かれる。

特にアメリカは、元々の成り立ちが棄民で成り立っている国なので韓国人ほどではないにしろ、日本人の棄民は少なくない。韓国人は昨年、韓国籍を捨ててアメリカ人になった人が過去最高に達したそうだ。文在寅現大統領が北朝鮮にばかり集中し、国内経済を失速させ、希望が持てないからだろう。

かつて浮世絵が19世紀にヨーロッパで高く評価され、日本に逆輸入されたように、日本の優れた床の間の文化を世界に紹介し、再評価できればと考えている。なぜなら、床の間が作り出す空間は、日本文化と日本精神を凝縮した場だからである。

入社1年目の日本の新入社員から聞いた話だが、会社の慰労会で居酒屋で借りた広めの個室に入る時、上司が皆に「奥から詰めて座って」と呼びかけたので、言われるままに奥に座ったという。すると上司から「おい、その一番奥は部長の席だろう」と注意されたそうだ。

一昔前なら当たり前のことが当たり前ではなくなっている。大学を出るまでに日本の礼儀やマナーを学ぶ機会はほとんどなく、社会人になつ

て初めて聞く話が多い。残っているのはせいぜい部活の先輩後輩の言葉づかいくらいで、敬語もうまく使えない新人社員は少なくない。日本の伝統的習慣には上座と下座があり、和室では床の間を背にした奥が上座だ。そのため、どこに行っても壁付きの奥を上座として、そこにそのグループで最も上位の人に座ってもらう習慣がある。儒教でいう長幼の序や社会的上下関係によつて、上座に座る人が決定される。

自宅に人を招いた場合、ゲストによつては上座に座ってもらうが、通常は家の主人（通常は父親）が床の間を背にした上座に座る。食事の時にも食卓の上座と思われる位置に父親が座つたもので、それを疑問に思う妻や子供はいなかった。

結婚後の披露宴でも、新郎新婦を前に前列に社会的に高い地位のゲストや友人が座り、親族は最も会場入口に近い末席の円卓に座る習慣がある。座る位置は、どの国でも重要で、フランスでも昔は父親の座る位置は決まっていた。

ところが同じ儒教が残る中国の正式な宴席では、ホストが円卓の最

も奥に座り、主賓をホストの両サイドに座らせる。それにホストが乾杯の音頭を取り、食事に手をつけなければ参席者は誰も飲み物や料理に手をつけてはいけない。中国ではホストが食事を振る舞うという考えだ。ではなぜ、日本では主賓や偉い人を上座に座らせる習慣があるのだろうか。たとえば時代劇を見ると商人の家に役人がくれば、役人は上座に座る一方、役人の家を商人が訪れた場合は、商人は客人だが下座に座っている。

社会的階級が非常にはつきりしていた江戸時代までは、階級の上位の人間が床の間を背にして上座に座るという習慣があつた。明治以降、階級制度が曖昧化し、複雑化したことで、上座に誰が座るかは、はつきりしなくなった面もある。

## 伝統は時間が経つにつれて その意味を悟っていく

現代の日本では、相手を重んじる姿勢を見せるために、喫茶店やレストランでさえ、壁付きの座席に相手に座ってもらう習慣が残っている。それも知らずに新入社員が最も奥

に座る姿に先輩が焦るという状況は増える一方だ。家でも父親が上座に座る習慣がない場合が多いのも原因しているだろう。

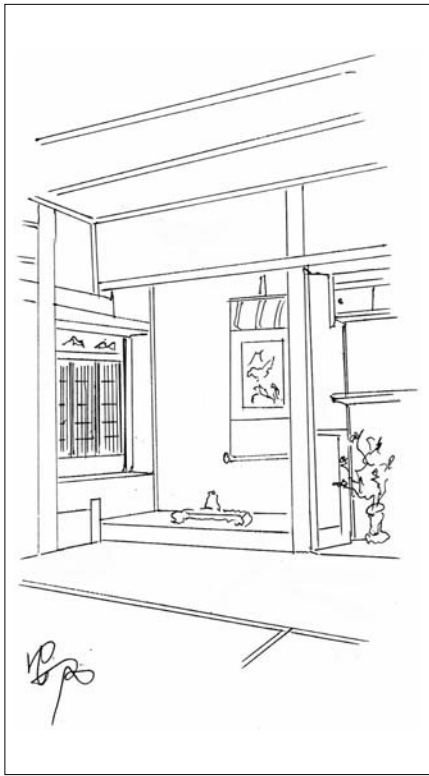
このような伝統は、通常、意味がなくなれば時代とともに自然に消えていくものだ。伝統は、最初は形から入り時間が経つにつれて、その意味を悟っていく。しかし、時間と共に意味が見出せなくなれば、伝統は消えていく。日本は戦後、反伝統左翼が幅を利かせ、意識的に伝統的精神を消し去ろうとした。

しかし、世界中にあるさまざまな礼儀やマナー、習慣は、そう簡単には消えない。だいたい都市化することと地元を離れた人間が伝統を軽

視するパターンが多い。地元のコミュニティが伝統を守っているのに対して、さまざまな背景を持つ人間が集まる都会は棄郷者も多く、当然、伝統を受け継ぐ意志もない。

タイでサッカーチームの少年たちが洞窟に入って豪雨で閉じ込められ、世界中の人々が救出劇に注目した。そして何よりの驚きは、少年らはレスキュー隊が来るかどうかも分からず、明かりも食料もない洞窟の中でパニックにならなかったことだ。

出家経験のあるコーチが瞑想を指導し、精神を落ち着かせたという。世界最大の仏教国タイでは、子供と大人の宗教的価値観に違いはあまりない。出家経験のあるコーチも注目された



が、タイでは出家は日常的で、1カ月だけ出家し修行する場合もある。

タイでは、人の頭を触ることは厳禁。人間の頭には聖なる霊が宿るといふ考えがあり、洞窟から救出された少年たちも、英国人レスキュー隊が頭を撫でないよう事前に注意があったという話もある。中国では頭に運が宿るといふ考えがあり、日本人上司が励ましの意味で頭を軽く叩いて翌日には辞められた例もある。

日本では、父親や学校の教師の権威が失われ、全てが横並びの友達のような関係に変化した。当然、床の間文化に象徴される上座、下座の考えも消えつつある。

日本は礼儀やマナーが世界的に優れていると高く評価されているが、それを支えた儒教的思想や階級意識が消えてしまうことで、確実に礼儀やマナーも消えつつある。日本が誇る、おもてなし精神もその心を失えば形骸化し、劣化するリスクもあるだろう。

本来あつた階級制度は崩れてしまつても、人を敬う精神は普遍的だ。親子関係、長幼の序、上司と部下の関係もなくていいものではない。責任感のないリベラル平等主義は、

人を自己中心に迫りやり、確実に社会を破滅させる。

では、なぜ、床の間に代表される精神文化がなくなったのかといえば、それを維持する上座に座るべき人の上に立つ人間が、その権威に寄り掛かり、その位置にふさわしい内容を備える努力をしなかつたからに他ならないと私は見ている。

組織のリーダーを含め、最も改善すべきは、自分の上ばかり見る下僕の精神だ。重要なことは責任ある立場に立つ者がどうあるべきかであつて、下のものがどう上に仕えるかではない。

階級制度が姿を消し、目上の人を尊敬する伝統がなくなったのは、尊敬に値する人間が減つていったことに比例している。自分の地位の上であぐらをかいているうちに、床の間と座布団が取り払われてしまったともいえる。

自分の上司に媚びへつらい、上司からの評価に意識が集中し、自分の部下からの評価に関心のない人間が昇進していく組織には危険信号が灯つている。その意識はひいては大切にすべき伝統精神も骨抜きにし、人間も国も劣化させてしまうだろう。